

都市の個性の“最大瞬間風速”を感じさせるシンボリックな街がある。大阪なら、近松門左衛門の時代からの芝居町・道頓堀だ。浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座の“道頓堀五座”やパリの凱旋門を思わす松竹座があった。“美術都市”はなにも、美術館の展示室や画廊にだけ存在するのではない。日常生活のなかに満ちるアート気分。大正・昭和の“大大阪”時代に芝居町で開花した<sup>てのひら</sup>掌のなかの美術の世界を愉しもう。

# 繁華街の装飾術

## —芝居町、モダン道頓堀—



神原 浩  
[地下鉄工事中・道頓堀川・大阪]  
昭和10年(1935)頃 銅版

パリやロンドンと間違いそうなエキゾチックな道頓堀風景。正面が松竹座、時計台に見えるのが戎橋南詰の食料品の「丸万」。手前では地下鉄工事で道頓堀を開削している。心齋橋・難波間の地下鉄は昭和10年に開通した。神原浩(1892~1970)は神戸出身で関西学院卒業後、本郷洋画研究所に学び、キューバの美術学校やパリでも学び、神戸女学院、関西学院で教鞭をとった。

美術都市

大阪

発見

第五回

橋爪節也

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室・主任学芸員

掲載資料はすべて筆者蔵

芝居町はどのように彩られるのか。役者絵や芝居絵などと言うまでもなく、一つは芝居小屋の表に掲げられる大きな絵看板がある。大阪では現代まで五代つづく浮世絵師・長谷川貞信が得意とした。

また道頓堀の浜側に芝居茶屋が並ぶのも芝居町らしい景観だった。紙幸、稲照、近安、三亀、松川、兵忠、大彌などの茶屋の軒先に提灯が連なる。このなかに美術と関係深い茶屋がある。三亀の主人が日本画家の大塚春嶺、その次男が舞台美術家・大塚克三であるし、大彌は後に「ダイヤ画廊」となった。

ところで今回とりあげるモダンなパンフレットも、芝居町・道頓堀の魅力だろう。大正十二年(一九二三)に開設された松竹座。松竹楽劇部(後のOSK)の最初の本拠であり、現在は上方歌舞伎の拠点である。建て替えの時に復元保存されたネオ・ルネッサンス式のファサードは、「大大阪」時代の華やかさを伝え、いまでも道頓堀のムードを高めている。

その戦前のパンフレット「松竹座ニユース」の表紙は、アールヌーヴオー風、アールデコ調であったり、画家のローランサン、彫刻家のフランクシー、アーキペンコの作品からとったデザインなど、前衛芸術までとりこんで実に洒落で馥郁たる香気がある。

デザインを担当した松竹座宣伝部の山田伸吉(一九〇三〜一九八二)は精華



昭和2年(1927)11月

〈C〉

[ 松竹座ニュース ]

「松竹座ニュース」の表紙は、後に映画俳優の写真が主になるが、大正末昭和初期のイラスト表紙には格調あるモダニズムが凝縮され、モノクロ目で分かりづらいが、わずかに二色の印刷とは思えない華やかさである。大正の余韻を残すビーズリー風 <sup>A</sup> や構成主義風 <sup>D</sup> など多彩で、右の「<sup>B</sup>」は有名な展覧会「アーモリー・ショー」(1913年)に出品されたブランクーシの彫刻「眠れるミュージック」が原形である(この彫刻は大阪市立近代美術館建設準備室も所蔵する)。



大正13年(1924)5月

〈B〉



大正13年(1924)3月

〈A〉



昭和3年(1928)3月

〈D〉



創設当初の本拠地・松竹座での公演パンフレット。「大正」時代の象徴といふべき「松竹楽劇部」の「春の踊り」。「松竹楽劇部」は大正11年に創設され、昭和9年に「大阪松竹少女歌劇団」、さらに「大阪松竹歌劇団」(OSK)となる。昭和8年に大阪劇場(大劇)が出来て移った。「大阪松竹歌劇団」は平成14年に解散したが、翌年、「New OSK 日本歌劇団」として再出発した。

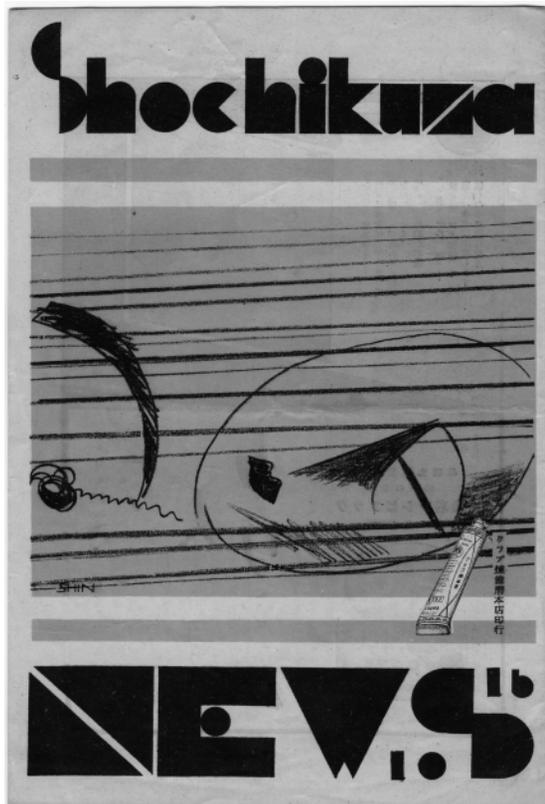


松竹楽劇部 [ 春のおどり特集号 ]  
昭和9年(1934)3月



昭和7年(1932)1月

〈E〉



昭和6年(1931)3月

〈F〉

「芝居や映画は好きですけど、美術には興味がおまへん」とうそぶく一般の「道ブラ」連中も、パンフレットを通して海外の新しい美術エッセンスに触れていたのである。

都市の個性  
時代からの  
門を思わ  
ない。日  
なかの美術

繁



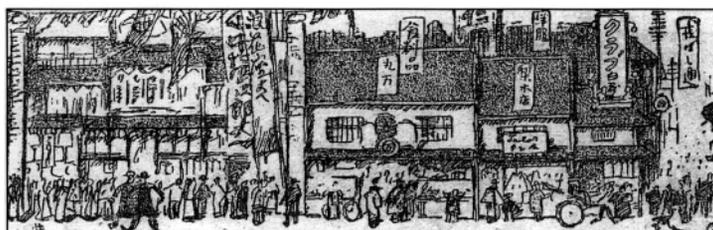
神原 浩  
[ 地下鉄工事中 ]  
昭和10年(1935)

インパクト 前衛芸術までとりこんで  
実に洒落で馥郁たる香気がある。  
デザインを担当した松竹座宣伝部の  
山田伸吉(一九〇三〜一九八二)は精華



徳力富吉郎  
[道頓堀の夜]  
昭和13年(1938) 木版

往來の絶え間ない戎橋のむこうに、「赤玉」「グランド・パレス」など道頓堀名物のカフェのネオンが明滅する。「いづもや」は鱧で有名。徳力富吉郎(1902~2000)は京都市立絵画専門学校に学んだ。日本画家として国画創作協会に参加するとともに、早くから木版画に進んだ。



浪花座 中村鷹治郎丈のぼり 丸万(後に1930年版画に描かれた食堂ビルになる) 戎橋筋

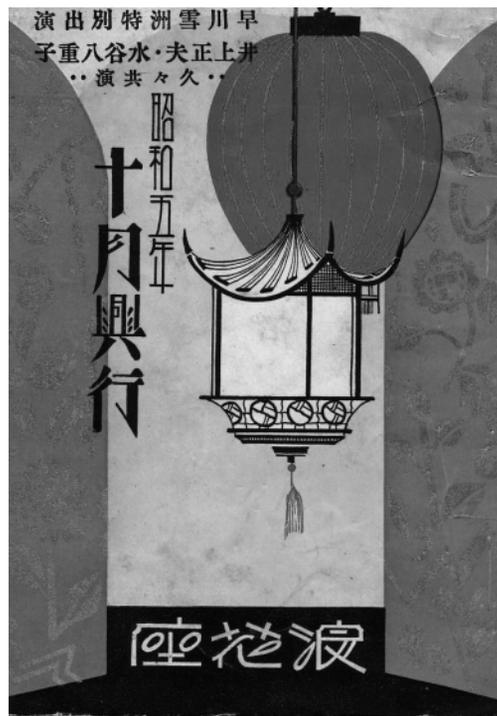
道頓堀雑誌社が刊行した雑誌「道頓堀」(第十八号大正9年8月)に載るイラスト。上の版画のようにネオン渦巻く歓楽境に変貌する直前、大正中期の通りの賑わいを描写する。右頁が浪花座、左頁は角座付近。詳しくは『モダン道頓堀探検 - 大正、昭和初期の大大阪を歩く - 』(創元社)参照。

[浪花座パンフレット]

浪花座のパンフレット二種。右はハリウッドスターの早川雪洲と新派の井上正夫、水谷八重子の共演。下は大阪の三代目阪東寿三郎が昭和4年に新劇運動に加わり立ち上げた『第一劇場』。「劇壇従来の慣習を打破し、華々しく斯界の一角に進出したい」と宣言するように表紙デザインも斬新で「痕」は芝居の題名。どちらも銀色を用いて美しい。



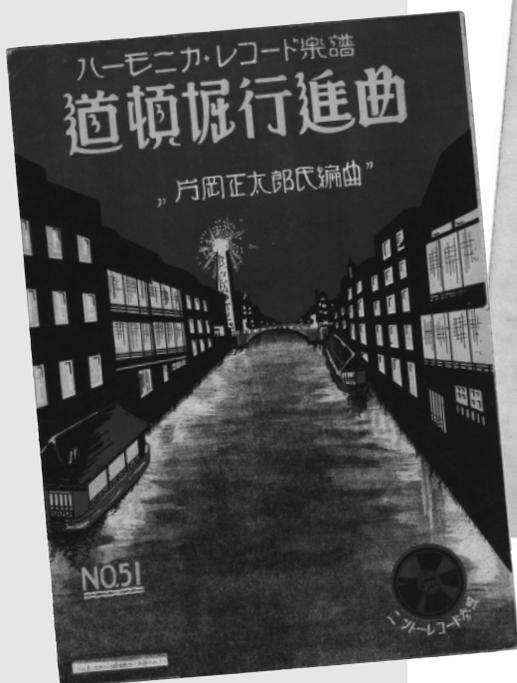
昭和4年(1929)



昭和5年(1930)

—失われた都市の記憶を求めて—

美術都市 大阪 発見 第五回



「道頓堀行進曲」ハーモニカ楽譜 昭和3年（1928）

「浪花小唄(道頓堀夜景)」ハーモニカ楽譜 昭和4年（1929）

「浪花小唄」で“いとし系ひく雨よけ日よけ”と歌うのは心齋橋筋商店街の日除けのこと。歌詞は心齋橋筋を抜け“てなもんやナイカナイカ道頓堀よ”と道頓堀に出る。楽譜の表紙もモダン。もう一つ“赤い灯、青い灯”の「道頓堀行進曲」は余りにも有名。川に浮かぶのは牡蠣船。



道頓堀の名物カフェ「赤玉」第二店のちらし。ローマ大宮殿を偲ぶというコピーがすごい。連日のジャズバンドの生演奏も豪華だ。

徳力富吉郎 [道頓堀の夜] 昭和13年（19）

往來の絶え間な  
に、「赤玉」「グ  
など道頓堀名物  
オンが明滅する  
艘で有名。徳力  
2000)は京都  
校に学んだ。日  
国画創作協会  
にも、早くから



角座

南に進むと  
千日前へ

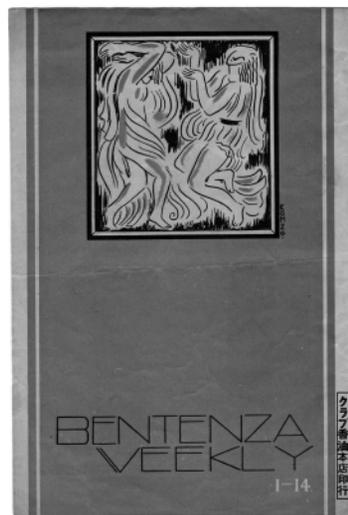
京興  
（「沖すき」で有名）



大正11年  
（1922）



同左裏表紙



【弁天座ウィークリー】  
昭和4年（1929）11月

五座のうち一番東にあった弁天座。大正時代は澤田正二郎の新国劇の本拠地として知られたが、後に映画が主となる。「松竹座ニュース」と似た雰囲気のパフレットだが印刷も同じプラトン社。



【角座パンフレット】

大正時代の角座のパフレットは他とデザインが少し違う。ページ数も少ない簡略な体裁だが、赤と黒など色彩の対比を強くし、人物の表情も簡略化して図案化を進め、印象に残る効果をあげている。裏表紙には、「松竹座ニュース」などと同様に、クラブ白粉の広告。

大正11年（1922）